
みずいろ

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みずいろ

【Nコード】

N9476D

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

ふとした弾みで蘇る戦場の記憶と、ロイの密やかな決意。晴れた空と砂漠の朧月にまつわる話。ハボックの瞳の色が、空色でなくて良かった。

多少ハボロイ傾向があります。鋼の錬金術師の二次創作です。

砂漠の空は、風が吹かなければ美しい青をしていた。

彼には良くある事だが、その日の仕事振りは天候によって随分左右される。

「今日の大佐は凄いですね」

指令室で一番重厚で、書類の多いデスクに座る人物にフュリーは尊敬の眼差しを向けた。実質トップともなれば決算の書類が多くなるのは仕方が無い。だがそれを全く苦にしていないう様子で、男の手は流れる様に動いている。ホークアイが優しい視線を向け、頷いた。

「お天気が良いと機嫌も宜しいわ。無能呼わばりされませんもの」

「今日は絶対に誰も言いません！」

「ええ。毎日こうだと本当に安心出来るのだけど」

ファルマンが腕を組んで首を傾げる。

「いやいや、それではきつと雨では済みませんよ。雪が雹か…」

「オーソドックスに槍かもな。でも大佐の事だから上から来るより、穴に落ちたりして」

ハボックの言葉にブレダが肉の付いた顎を擦る。

「案外あり得るぜ。女取られた奴が穴を掘るかもしれん」

「そこら中ボコボコじゃん。大佐なら絶対落ちる」

普段乗らないホークアイまでが笑い出しそうなのを堪えている。あんまりな言い様に流石のロイも聴こえない振りをするのが苦しくなつてきて、咳払いをした。

「君達…仕事は捗っているのかね」

「勿論です」

「しかしだね」

むっとした表情で口を挟もうとするロイに、ホークアイは席を立ち、つかつかと歩み寄った。彼女が席を立った時点で、何を言われるのかと身構えてしまっているのだからこの男に威厳も何も無い。

「さ、今日期限の書類は後半分、つまりこの山です」

「……後半分……」

ロイはホークアイの言葉を鸚鵡返しに呟いた。ホークアイの鋭い視線が空を切り、ロイの目を射抜く。

「本来なら既に片付いている分を、つい先程まで持ち越してこられたのはご存知ですね」

「わ、わかつているとも」

今日は頗る有能だが、昨日までは調子が悪かった。彼の場合の調子とは体調の問題でなく気分の問題だと側近達は断じている。

「これが上がるまでは帰れませんよ」

今崩しに掛かっている山こそが、本来今日片付けていただく分です、とホークアイはロイの処理を待つ書類の上に掌を乗せ、重々しく諭した。

ああ…とロイが遠い目をして呟く。

「私が体を壊すとしたら腱鞘炎か、肩か腰か…一体どこだろう」

「いつもより残り少ないじゃないですか」

苦笑を浮かべる美しい中尉に、ロイは情けない声で応じた。

「空がこんなに晴れているのに私は机で仕事…勿体無い」

「仕事はするもんでしょ。あんた、何だかんだ言って溜め込むくせに。今日の出来っぷりならホントはもうそろそろ片付く筈だったんですよ」

ああ勿体無いぞと呟く上司に呆れた声でハボックは突っ込んだ。

「煩いぞ！ハボック！！」

名前を呼ばれた金髪の少尉は煙草のフィルタを噛んで、笑いを噛み殺す。

その「ハボック！！」は、部下の手厳しい突込みを叱責するものではない。彼は上司の意図を正確に把握していた。

「へーい。コーヒー入れてきまーす」

やれやれとわざとらしく言いながら席から立ち上がった部下に、ロイがあいつは生意気だとかなんとか、ぐだぐだと悪態を吐く。

（仕方ないわね）

こうなったロイはコーヒーを飲みながら作業を続けるより、きつちり休憩を入れた方が切り替えが上手くいく。効率も上がる。

ホークアイは休憩やむ無し、と判断した。

「…時間的には少し早いですが休憩にしましょう。大佐、これらの書類は後ほど処理済で回しておきます」

「頼む」

「畏まりました。お疲れ様です」

につこりと微笑んで処理済の書類のチェックを始めた彼女に、ロイは彼女が——いや、彼女も上機嫌だと悟る。

これなら少し位休憩時間を多く取っても大丈夫だろう。

「ああ、今日の私は凄いぞ？なのにあんな生意気な」

「それは普段の行いがそれ相応だからです」

「…まあそうだがな。だが今日は違う。あいつめ…マッサージの刑にしてやるっ」

ロイが何を言いたいのかわかったホークアイは、今度こそふき出すのを堪えられなかった。

「刑じゃないでしょう。大佐が少尉にしてもらうのに」

「マッサージをさせる刑、だ。うん」

肩が凝った、目が痛いとかねて書類仕事から逃げ出そうとする男に、ならばとホークアイが宛がったのがハボックだった。

銃の腕は勿論、体術にも長けた男は、怪我や病気の応急処置、更には人体の急所を良く知っている。軍人だから、皆ある程度の知識は叩き込まれているが、彼は手先が器用なのに加え、タイミングを掴むのが上手らしい。たまたま演習中に肩を脱臼した部下がいたのだが、ハボックは難なくそれを嵌めてみせた。その手際の良さはホークアイから見ても目を見張るものがあった。

どうやらハボックはどこがどうなれば痛いのか、どんな症状が出るのかといった体の構造にも意外な程明るいらしい。

最初は男に触られるのは嫌だとかなんだと言っていたロイだが、途中からぴたりと文句を言わなくなった。

側近達には現金だからかわれたが、味を占めたロイは事ある毎にマッサージをねだった。

そんなこんなで最近のハボックの腕は、マッサージが終わった頃にロイがすっかり眠ってしまうレベルにまで到達している。

給湯室から香ばしい匂いが漂い出すと、つられて指令室がざわめき出す。上官二人が揃って休憩を入れることを確認し、人々はそれぞれの手を休めて好きに寛ぎだした。

「どうぞ」

煙草を銜えた金髪の少尉のサーブに、ロイの唇が弧を描く。

「ハボック」

「はいはい。お茶が終わったら、まず肩からいきますか」

「それから首」

「畏まりました」

芝居掛かった仕草で腰を折る男に、ロイは黒い瞳を細めて頷いた。

どうせ寝てしまうでしょうから、と美しい中尉から妙な許可を貰って、二人は佐官用仮眠室に移動した。

ロイは部屋の隅の小さな窓を覆っていた遮光カーテンをいそいそと開け、ベッドに乗り上げる。彼はそのままベッドと平行に脚を投げ出した。

「……どっち向いてんですか」

首を捻り、ちらと見上げてきた男は威張って応えた。

「空が見える方」

はいはいと背中を軽く叩いて、言外にやり難いから背を向けて座ってくれと匂わせる。このままだとハボックも佐官用のベッドに乗り込まなければ、遠い方の肩の調子を診られない。

「あんた、本当に今日は機嫌が良いですね」

「晴れているからな」

ハボックに促され、青い軍服の上着から腕を抜く。それを受け取った男は、ベッド脇に置かれた椅子の背に皺にならないように掛けたもぞもぞと向きを直したロイは、胡坐を組んで専属マッサージ師に背を向ける。だが視線はベッドの足元の先に有る窓の外に向けられたままだ。

部屋に光は差し込んでいるが、ロイの位置だと多分空は見えない。

「ここは見難いでしょ。狙撃を警戒した造りになってるんだから」

「構わんさ。光の加減で空が判る」

ハボックは分厚い掌をロイの肩に置き、凝り具合を診ていく。ようやくロイは首を捻るのを止めた。

「お前は知らんだろうがな」

首を前に倒し俯いたまま、独り言のような声の大きさで、ロイは呟いた。ハボックにはその表情は見えないが、声に何の翳りもないので特に気にしなかった。

「何を」

「知らなくても良い事」

なら言うな。

などと言っているはこの男との会話は成り立たない。

訊き返して、答えをはぐらかさずに返してくるかどうかは五分五分。

「気になるっすね」

「空の色の青さだ」

「どう反応すればいいんですかねえ。単純な色の話ですか？」

「ほう、単純。では少尉、この空が何故青いのかを説明してくれたまえ」

「えーと確か紫外線？じゃなくて青系の光でしたっけ？……大氣中を……って大佐」

遠い記憶の中から慌てて科学の知識を漁り出そうとして、気付いた。ロイが体を震わせて笑っているのが掌を置いた白いシャツ越しに伝わる。

これは違う。

「ああーこういう話じゃないっすよね」

ロイはふふん、と鼻を鳴らして笑った。

「絶対に私の方が詳しいのに、態々訊くか」

「でしょうねえ」

意趣返し、とばかりにハボックはロイの肩に置いた親指で、態ときつい力を加えてやった。

「いて！いたたたハボック！！」

「あー凝ってますねえ」

「こら！これは刑なんだぞ。もっと加減……」

「じゃ、次いきますか」

「……ッ！」

「はい、寝っ転がって。あ、大分肩凝ってますから」

これは痛いですよ、という前置きが前置きにならないタイミングで、ハボックの親指が肩甲骨辺りの筋肉を解しに掛かった。

さんざんお気に入りの犬とじゃれて、マッサージが終わる頃。

ロイはすっかり脱力していた。

既に意識は半分以上落ちている。

「寝ちゃって良いっすよ」

足元に寄せてあった布団を引き上げて掛けてやると、ロイはもそもぞと身動きしながら欠伸を堪えている。

「……カーテンは締めるなよ……空が見えなくなる」

ハボックが見下ろすと、ロイは痛かったのか、それとも先ほどの欠伸の所為なのか涙目になっている。

それでも彼は口元に笑みを浮かべていた。

「…二十分後には起しますから」

「ああ」

そのまま滑り落ちる様にしてロイは眠りに就いた。

砂漠の空は、風が吹かなければ美しい青をしていた。

彼が戦争に行った土地は砂漠の中にあつた。そこで真っ先に感じたのは空気が乾燥しているという事と、空の色が青いという事だった。イシュバールの民の住む東の砂漠の空は、アメストリスでは滅多に見掛けない、澄んだ色をしていた。

それは数日も経たない内にロイの第一印象を覆した。

空は砂嵐や爆風で舞い上げられた砂塵の所為で直ぐに濁る。ロイはその変化の激しさにも驚かされた。その戦地で聞いた話の中で、今でも印象に残っているものがある。

『砂漠の朧月』だ。

あの戦争では、敵の襲撃を警戒し、火を囲んで長い夜を過ごす事が度々あつた。

砂漠のように見晴らしの良い場所では、夜は大人数で固まり、出来るだけ明るく火を炊いて過ごす方が安全なのだ。火を燃やせば当然相手に居場所を教えることになる。だが身を隠す場所が無いのはどちらも同じだ。それならば辺りを見えやすくする事で、ゲリラ達が闇に紛れて潜り込むのを防ぐ事が出来る。

夜営の火は敵を見つけ易くするために、更には自分達を守るために、遠くまで照らすものでなければならぬ。夜襲を掛ける隙を与えぬよう、ごうごうと音を立てて、火は一晩中燃やされ続ける。

その任務で、一度だけ一緒に不寝の番に当たった顔も名前も覚えて

いない兵士から聞いた話だった。

火は大きな柱のように、燃え盛っている。

けれど、火が照らす範囲は——砂漠全体を考えれば、そう広いものではない。それは彼方まで続く砂漠のほんの一部に過ぎなかった。視線を巡らせれば月明かりに支えられた、漠とした闇がすぐそこにある。

そしてそこに訪れる夜は、唯煌々と白い月に照らされた静かな砂の海を見せていた。

「あれこそが砂漠の夜だ」

砂の海を見詰め、その男はしみじみと言った。

砂漠に詳しくあったから、ひよっとすると学者か何かだったのだろうか。

その兵士は付け加えてこんな話をした。

この東の国境付近の砂漠には、年に数回、砂嵐が訪れる。そしてそのたった数回の日の夜にだけ、砂漠では朧月夜になるのだ、と。

朧月はアメストリスでは、水分の多い春の夜の象徴だが、砂漠では違う。

それは嵐の夜に他ならない。

オアシスを利用して作られたイシュバールの都市周辺の気候は、砂漠よりは水分も多く落ち着いていた。

だがそれも焼き払ってしまえば砂漠と同じ。灰と煤と爆煙が、空だけでなく街にも人にも降り注ぐ。

風に煽られたそれらと砂とが一緒になって世界を灰色に巻き込んだ。何もかもが埃っぽく、乾燥していた。気付いたら空も大地も朧だった。

自分は前線で原因の大半を作り出していたのだから、水を奪われた土地が乾燥し崩壊していったのは当然だった。

次第に彩を奪われる世界にあって、血液の赤と炎の紅が正気と狂気の狭間に揺れる人々の意識に残るアクセントになった。

それすらも時間と共に変色し、やがては黒くくすんだものしか生み出さないと気付いていたけれど。

容赦の無い戦場の記憶。

それは砂漠の乾燥し尽くし濁った空と共に、誰の目の奥にもこびり付いていた。

戦場から帰還したばかりの兵士達は、何かの機会がある毎にこう言った。

「この国の空は穏やかだ」

この空は砂漠の空とは違う。

空は暗く濁ってはいない。

砂漠特有の苛烈な太陽光も、ここでは大気中の水蒸気に和らげられる。

肌に触れる空気が柔らかいという感覚。

兵士達は陽の光を感じる度、空を見上げる度に、目に映る景色と戦場とを差別化し、戦争の終結を確認した。それはロイとて同じだった。

だが——あの砂漠で見たもの全てを、灰色で語れる訳ではなかった。

戦争の局面で、ほんの一時やって来る小康状態の時に。
あるいは一触即発の、火蓋が落とされる寸前の恐ろしく静かな瞬間に。

砂漠の空はロイの知る空より鮮烈な青を見せた。

四方を見渡しても地平まで続く空。足元の砂以外は皆、その青さと広さに飲み込まれていく。

あんな空の色を、ロイは他に知らない。

少なくともない理性的な者が、この戦争の無意味さを感じていた。きっと何も変わらない。

ここでイシュバールの民を滅ぼしても何の意味も無い。

無為な死に、人の心が荒んでゆくだけだ。喪ったものの大きさに、深い悲しみと怨念が双方に募るだけだ。

国の為になる筈も無ければ人の為になる筈も無い。

そう、多くの者が言葉に出せなくとも思っていた筈だ。

もつと別のやり方が――共存する道がある筈だと。

だがあの空は。

そう思う事すら投げ出したくなる様な色だった。

ただ在るだけでそれ以上何も望みはしない。

滅びゆくものも惜しみはしない。

無慈悲なのか、大いなる許容なのか。

美しいのか恐ろしいのか。

ここが戦場であるという事を頭で繰り返さなければ、そのまま大地に仰臥してしまっただろう。丸めた背と首筋を焼く太陽。屈み込んだ脚の間で砂にライフルを立て、それに縋る様にしてその衝動に耐えたのだ。

「大佐」

約束通り起しに来た、大きな男の遠慮がちな声は、耳に馴染んでいくものだった。

「起きているよ」

目は閉じたままロイは応える。

枕元に佇んだハボックが覗き込んだその顔は、先刻と変わらず安らかだった。ハボックは安堵しながら、それでも何時もと様子が違う彼の事が気なつて仕方が無い。

妙にハイなロイは、ふとした時に顔を出す。何が原因であるかははつきりと訊いた事はない。だが、それが何という名の出来事に由来するのか位はわかつているつもりだ。

ハボックが彼の額に触れようと指を伸ばしかけた。
途端。

深く閉じられていた瞼が唐突に開いた。黒い瞳がハボックをひたと見詰めている。

「えーと……おはようございます」

「どちらかと言えば水か」

「水、飲みますか」

「違う」

「はぁ？」

怪訝そうな様子のハボックを気にもせず、ロイはじつとハボックを凝視している。

何も悪い事はしていないが、如何せん落ち着かない。

ハボックは狼狽えそうになる自分を何とかしようと、口を開いた。

「……止めて下さいよ、水難の相が出てるとか」

「誰がそんなことを言った」

「いや、あんたがあんまり熱心に俺の顔を見てくるから」

「お前の顔なんか見てない。目だ、目」

「……見詰めて下さってるんで？」

瞬時に叩かれた額を撫でつつ、お袋と同じ色つすよとハボックは口
イに良く見えるように瞼を二本の指で抉じ開けた。

通常よりも光量の少ない部屋でも、反射的に瞳孔がきゅっと閉じた
瞳を、ロイは探る様に覗き込む。

「何色だ、これは」

「水色でしょ？」

「そうだな。水色だ」

もう良いっすかとハボックは指を離し、幾度かきゅっと瞬きを繰り返した。

「うん、もう良い」

「大佐？」

「ん？」

ハボックが何時もより心持ち真剣な顔をしていた。

それが妙に懐かしい表情で、ロイは目を細めた。あれだ、親が子供の怪我を心配する顔だ、これは。

「馬鹿者」

笑いながらロイは言った。理解に苦しんでいるらしいハボックが、垂れた目尻を更に下げて呻っている。

（なあ、どうだ）

ロイは心の中で自分に相槌を求める。

彼はあの戦場の空をどこにも纏っていない。

うつかり覗き込んだ先があの虚空でない事に、どれ程救われているか。

同じ青という名で括られる色なのに、随分違う色じゃないか。

あの青は近寄り難いとすら思わせる色だった——ロイはこの国に帰って来てから、漸く言葉として当時の感覚を整理することができた。
「難しく考えるな」

柔らかな金色の頭を引き寄せて、反射的に閉じられた瞼に口付けた。
触れた薄い唇の下で、瞼の直ぐ下で眼球が忙しなく震える感触が、
彼が今混乱の最中にいること知らせる。

ロイはハボックに隠れて笑みを浮かべた。

「気に入っていると云っているんだ」

この色こそが、ロイを暗い過去の戦場から、現在へと連れ戻す。あの乾ききつた恐ろしいまでの青から、水を含んだ空気を取り戻させる。

過去の上に現在があるというのなら、その影響を取り除く事はきつと不可能だ。良くも悪くも、その過去が無ければ今の自分は無いと彼は知っている。だがその過去は時々『現在』に忍び込み、ロイを奪ってゆこうとする。

ロイは過去に捕らわれて、足を止めてしまっわけにはいかないし、足を止めるつもりもない。ここも確かに新たな戦場に違いないとしても、進むべき道に迷う事は無い。

水のあお。

それは彼を癒す、戒めの色。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9476d/>

みずいろ

2010年10月9日11時18分発行